

山口学芸大学 入学試験(令和七年度 一般 1期)

国語 (時間 七〇分) その一

一次の文章は、池内了著『清少納言がみていた宇宙と、わたしたちのみている宇宙は同じなのか?—新しい博物学への招待』の一部である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改めたところがある。)

小学生の頃、理科の時間で一番不思議だったのは、磁石の実験だった。(1)何の()もない鉄の棒なのに、離しておいた針や釘を手に感じるくらいの強い力で引きつけるからだ。ところが、アルミのコップやガラスは嫌いなのか、そばにくっつけても引きつけようとしない。鉄の棒にも好き嫌いがあるらしい。下敷きの上に鉄粉をふりまいて下に磁石をおき、トントンと下敷きを弾くと鉄粉がきれいな筋に並ぶ。目には見えないけれど、下敷きを越えて磁石の端から端へと力を及ぼす線が走っているようだ。

続いて、下敷きを脇でこすって近づけると、髪の毛や紙切れが引きつけられるという実験もあった。こちらの方は、ガラスや水晶やプラスチックのようなものが持つ性質らしい。磁石はいつまでも釘を引きつけているが、こちらの方は、すぐに引きつける力を失ってしまうようだ。

この二つの実験から、同じ引きつける力でありながら、違ったものらしいと気付かされた。小学生だから、この程度で終わってしまったと思うけれど、世の中には目に見えないが物を引きつける不思議な力があるものだと感激した。これが、私の理科への目覚めだったのだろうか。

遠く、ギリシャ時代以前から、(2)これら二つの力の存在は知られていた(『マグネットワールド』)。

世界のいずこでも、磁石の発見は鉄器の発明と強く結びついている。鉄器が発明された頃、鉄を作る鉱石中に混じって天然磁石が発見されたと推定されるからだ。鉄鉱石に混じっている磁鉄鉱が天然磁石なのである。※ヒッタイト族が鉄の武器を製作したのは紀元前一五〇〇年頃だから、きっと磁石の存在もその頃から知られていたに違いない。マグネットという呼び名は、小アジアのマケドニア地方あるいはイオニア地方にある「マグネシアの石」に由来するらしい。※ルクレティウスは、『物の本質について』の中で、羊飼いが野原を歩き回っている間に靴の鉾や杖の先に磁石がくっついた、と書いている。

一方、後者の摩擦電気は、紀元前五〇〇年頃、ギリシャの※ターレスが琥珀を磨くと髪の毛を引きつけることに気付いたのが最初のものである。※プラトンは、著作『ティマイオス』に、「琥珀を摩擦すると軽い塵を吸い寄せる」と記している。現在、電気を英語でエレクトロシティーと呼ぶのは、ギリシャ語で琥珀を指すエレクトロンに起源がある。そう名づけたのはイギリスの※ウィリアム・ギルバートで、摩擦電気と磁石の力は別物であることを実験で示した最初の人であった(一六〇〇年に刊行の『磁石論』)。

古代文明の中心地の中国でも磁石の存在は古くから知られていたと思われる。春秋・戦国時代には鉄器が登場していたので当然、鉄鉱石に混じって天然磁石も発見されていたと想像されるからだ。磁石に関わる最も古い文献は、秦の時代の紀元前二三九年頃に書かれた『呂氏春秋』らしい。ここには、磁石の注として「※石鉄之母也。以有A石、故能引其子」と書かれている。やはり、鉄鉱石から天然磁石が発見され、金属を引きつける力に注目していたのだ。ここでは磁石ではなく「A石」と書かれていることが面白い。磁石が鉄を吸い寄せる様子が、乳飲み子をAしんで抱く母親に似ていることから連想されたのである。

やがて、天然磁石を中華料理に使う「ちりれんげ」(スプーン)の形に削って平らなテーブルの上に置くと、クルクル回ってそのうちに南の方を指して止まる「指南器」が発明された。磁石が、いつもある決まった方向に向くことに気付いていたため、ちりれんげの形は北斗七星の並び方をかたどったと言われている。北斗七星は、日本で「ひしやく」と呼ばれるが、中国では「ちりれんげ」の形に見えたらしい。【 X 】

指南器のちりれんげの頭が向く方向が(a)で、反対側の取っ手の方向に北極星が見える。北極星は、一晩の間いつも同じ(b)の方向に見えて良い目印になる上、北斗七星のひしやくの向きから時間まで推測できる。広い国土の中国であればこそ、(c)漆黒の夜、指南器は方向と時間を知るのに便利であつたろう。

ところで、北極星を見つけるのに指南器を使つたはずなのに、なぜ「指北器」と呼ばなかったのだろうか。一つの理由として、中国では「天子(c)面す」で、高貴なるものは(d)に位置して(e)を向くべしとしたためではないかと思われる。天子の視線方向を重視したのだ。あるいは、古くから発達した易学では北東の方向は(f)ギモンであり、北狄と呼ぶ契丹や匈奴などの危険な異民族が多数いるため、北の方を指す道具にはしたくなかったのかもしれない。【 Y 】

芸事や武術を教え導く「指南」という言葉は、この「指南器」に由来する。指南器がいつも同じ方向を向く、それと同じで人を同じ道に導くという意味に転化したのだろう。

そのうちに、板を魚の形に切つて中に天然磁石を組み込んだ「指南魚」が作られた。指南魚を水に浮かせると、必ず、魚の頭は南、尻尾は北を向くようになる。ちりれんげの場合、置いた台が傾いていると方向に狂いが生じるが、水はいつでも水平になるから、方向が正確に割り出せるようになった。指南魚はやがて(3)ラシンバンへと進化し、シルクロードを通過してヨーロッパに渡り、一五世紀の大航海時代を可能にした。【 Z 】

また、磁石を仕込んだ人形を車に乗せて、いつも南を向くようにして走らせたのが「指南車」である。子どもの頃に読んだ『三国志』では、諸葛亮孔明が生前に自分に似せた人形を作らせておき、病気で亡くなった後、人形を指南車に乗せて走らせ、い

かにも孔明がまだ生きてるように敵に思わせた、という話があったと記憶する。「死せる孔明生ける仲達を走らす」の故事を、指南車の仕掛けで教えてくれたのだった（江戸時代の指南車は、齒車を使った機械からくりになっており、もはや磁石を利用した単純なものではない）。

日本で磁石の存在が知られたのは比較的遅い。縄文時代に鉄器が使われるようになったけれど、渡来人が中国から輸入した鉄の延べ板をただ加工しただけで、鉄鉱石から製鉄したわけではないからだ。弥生時代になって、日本でも「タタラ製鉄」が行われるようになったが、砂鉄が使われたので大きな天然磁石は発見されなかったようだ。しかし、五世紀中頃から鉄鉱石を掘り出して製鉄を行うようになって、ようやく磁石が発見されたのではないかと推定できる。このように、⁽³⁾当時の技術や使った材料で古代史を読み解くと、別の歴史までわかるようになって楽しいものである。

【中略】

一般に、日本の芝居は、科学に関わるテーマが少ないが、意外にも古典演劇である歌舞伎と狂言に磁石が取り上げられているのは興味深い。磁石の鉄を引き付ける力の意外性を芝居の展開に利用しようとしたに違いない。

一七四二年に初演された「毛抜」は、隠された磁石をうまく利用した⁽⁴⁾キバツな推理芝居である。歌舞伎十八番に入っている演目だが、あまり知られていない出し物のようなので、ちょっとあらすじを紹介しておこう。

【中略】

狂言には、ずばり「磁石」という曲がある。遠江の国の者が都見物をしようと京に上る途中の坂本の宿で人売りの「すっぱ」（無頼者）に会い、⁽⁴⁾あわや宿屋の下人として売り飛ばされそうになる。その謀り事に気付いた男は、代金を横取りして逃走する。※おっとり刀で追いかけてきたすっぱが太刀を振り回すと、この男、急に元気になって、

某は、唐と日本の境にちくらが沖といふ所に磁石山といふ山が有、其山の磁石の精じや

と言い出す。そして、

今汝が太刀を見ればせいせいとして飲みたい程に、切先から只一呑にせふぞ

と脅すのだ。磁石が刀を引きつけることを観客も知っていることが前提となっている。すっぱもこのことを知っているのだから、この言葉に暗示を受け、

きやつが「ああ」と言へば、何とやら此太刀がどみた様な

と思ってしまう。「どみた」は「どんよりと曇ってしまう」という意味だから、蛇に睨まれた蛙ならぬ、磁石の精に睨まれた^Bとなつたのだ。この男、磁石の精は太刀を鞘に戻せば元気を失ってゆくという芝居をして、うまくすっぱに太刀を収めさせてしまう。太刀が鞘に収まると、この男死んだふりまでするから、すっぱはつい仏心を出して、太刀を抜いてこの男の枕元に置いて呪文を唱える。磁石の精が太刀を見れば生き返るかもしれないと思つたのだ。死んだふりをしていたこの男、突然太刀を手に取るや、振り回しながらすっぱを追っかけ、「やるまいぞ、やるまいぞ」と幕になる。すっぱは、この男に途中から「磁石、磁石」と呼びかけているから、磁石という言葉そのものも一般化していたことがわかる（『狂言記』）。

いづれも⁽⁵⁾荒唐無稽のナンセンス芝居だが、磁石の鉄を引きつける力への不思議さが、このような筋書きにさせたのであろう。このように、古今東西を問わず磁石を持つ不思議な力は知られていたが、なぜそのような力を持つのかは長い間謎であった。ギリシャのタレスが「磁石は魂を持つ」と言つたのも、謎めいた磁石の力の不思議を表現したかったのだろう。なぜ、磁石は鉄を引きつけるのだろうか？ この⁽⁶⁾ソボクな疑問の解明のためには、さまざまな実験を積み重ね、磁石が持つ性質を明らかにする必要があった。そして、この疑問に最終的な解答が得られたのは、二〇世紀に入ってからのことなのである。ソボクであればこそ、難問であつたのだ。

（「第5章 「じしやく」―古郷を磁石に探る霞かな から）

（注）

※ヒッタイト族Ⅱアナトリア（現代のトルコ共和国あたり）の、製鉄技術を武器として帝国を築いたといわれる古代民族。

※ルクレティウスⅡ古代ローマの詩人哲学者（紀元前九九年頃〜五五年）。彼の『物の本質について』は、近代科学にも通じる原子論的自然観を詳述した長編詩。

※ターレスⅡ古代ギリシャの哲学者、数学者（紀元前六二四年頃〜五四六年頃）。タレスとも表記する。タレスの定理や相似形の性質を使ってピラミッドの高さを図つたことなどで有名である。

※プラトンⅡ古代ギリシャの哲学者（紀元前四二七年頃〜三四七年頃）。その著書で『テイマイオス』には、琥珀が軽いものを引き付けることが書かれている。

※ウィリアム・ギルバートⅡイギリスの物理学者（一五四四年〜一六〇三年）。医師としてエリザベス一世やジェームス一世の侍医も務めた。

※石鉄之母也〜故能引其子Ⅱ石は鉄の母であり、子どもを引き寄せるように鉄を呼び寄せる。

※おっとり刀Ⅱ非常の場合、刀を手に持ったまま現場にかけつけること。とる物も取り合えず、大急ぎで駆けつける様をいう。

問一 傍線部①②のカタカナを漢字に改め、漢字はその読み仮名を書きなさい。

問二 傍線部(1)「何の()もない」とあるが、()の中に漢字二字を入れることによって、「取り立てていふべきことでもない、どこにでもある」という意味の慣用句にしなさい。

問三 傍線部(2)「これら二つの力」とあるが、それぞれのようなか。本文からそれぞれ四文字で抜き出すことにより、答えなさい。

問四 空欄 A にはあてはまる漢字一字を入れなさい。また、B には文中から適切な言葉を漢字二字で抜き出しなさい。

問五 空欄 (a) (e) に、それぞれ「北」「南」のいずれか一字を入れて、文を完成しなさい。

問六 傍線部(3)「当時の技術や使った材料で古代史を読み解くと、別の歴史までわかる」とあるが、ここでの「別の歴史」とは何か、文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問七 本文には、「世界のつながりとは、不思議なものと思う。」という一文が抜けている。【X】() 【Z】のうち、どこに入れたらよいか。記号で答えなさい。

問八 傍線部(4)「あわや」とあるが、この言葉を用いて、十五字以内で短文を作りなさい。

問九 傍線部(5)「荒唐無稽」とあるが、次のア～エの中から、その意味として最も近いものを記号で答えなさい。

- ア 漠然として具体的にでないこと
- イ 練習せずにいきなり臨むこと
- ウ 誠実でなく信頼できないこと
- エ 現実を起こるはずがないこと

問十 波線部「これが、私の理科への目覚めだったのだろうか。」とあるが、今のあなたにとっての「学びの目覚め」となった体験について、二百字程度で述べなさい。

二 次の文章は、須賀しのぶの小説『夏は終わらない』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改めたところがある。)

三ツ木高校の万年弱小野球部は、ほとんど野球経験のない若杉監督と、野球経験は豊富だが授業中は存在感の薄い田中部長の指導のもと、エース月谷と主将笛吹の二人をメインに急成長を遂げている。最近では新聞に掲載されるなど、夏の地区予選を前に注目されるチームとなってきた。関係者やチームメンバーは、それぞれに熱い想いと悩みを抱いて最後の甲子園に臨もうとしていた。次は、その新聞記事の一節である。

『連載・夏への道(第五回) 躍進する公立高校(後編)』

この春、大きな成長を見せた三ツ木高校も、プロも注目する左腕・月谷を中心に、夏に向けて注目を浴びている。総勢十七名のチームを率いる若杉監督(28)は、実は三ツ木高校に来るまで野球経験がほとんどないという。

「おかげで生徒たちがずいぶん頼もしくなりました。練習試合の後でも生徒同士プレーのコツや練習メニューの組み方などよく話しているようで、今では自分たちで毎日メニューを組んできます。私は何もしていません」とケンキョに語る。

「以前は負い目もあったのですが、最近は素人だからこそその視点を大切にしています」。生物教師ゆえ栄養面についての指導を強化し、またデータを分析してそれぞれの選手の傾向を数値化しているという。主将の笛吹も「一目でわかる形にしてくれるので、わかりやすい。自分だけではなく、チームメイト同士どう補うべきか参考になる」と語る。現実には、打撃は上向いているという。この夏の躍進が期待できる。

泉千納

職員朝礼の最後に、校長は今朝の新聞を教師たちに広げてみせた。

「皆さんもご覧になったと思いますが、蒼天新聞さんに野球部の記事が載っています！」
大仏のような顔をほころばせて彼は語る。いくつかの視線が、若杉のもとに集まった。

「生徒たちは可能性のカタマリです。部活動において、彼らの自主性を引き出し、楽しさや喜びを味わわせ、より豊かな学校生活を目指すとともに人間として成長させる。それが我々教師の役目です。そこに経験の差は関係なく、生徒とともに自主的に何ができるかを探っていく姿勢が大事なのです。若杉先生は、じつによくやっています」

「は、い、いえ……田中先生にずいぶん助けていただいているので……私はとくに……」

若杉は(1)しどろもどろになりながら、助けを(2)乞うように、田中に目をやった。野球では頼りになる部長は、いつも通り起きているのか寝ているのかわからない様子で、ぼうっと佇んでいるだけだった。

「田中先生も今年は非常に積極的に部活動に参加されていて、頼もしい。野球部の躍進は、お二方の努力のたまものです。先日の組み合わせで無事予選の相手も決まり……ええと若杉先生、初戦はいつでしたかな？ 相手は？」

「来月の十一日、熊谷公園球場第二試合です。相手は多賀部商^{たがべしょう}です」
 噴き出る汗を拭^{ぬぐ}う。

昨年はいきなり初戦で、東明^{とうめい}を引き当てるという大波乱だったが、今年は春ベスト16なのでDシードをとれている。そのためいきなり超のつく強豪とぶちあたることはないが、今回の初戦の相手である多賀部商も去年までなら普通に負けている相手だ。

そしてAシードのブロックに入ってしまったため、順調に勝ち進むと四試合目で東明にあたることとなる。そこまでも、公立の強豪が⁽²⁾手ぐすねをひいて待っている。

おかげで昨日の笛吹は「なんかすげーハンパ」といじられていたが、大半の者が、三試合は勝てるなと踏んでいただろう。同時に、東明をクリアすればほとんど優勝だとも。

「ああ、そうでした。今年は一丸となつて、野球部の応援をいたしましょう。生徒たちにとつても、一丸となつて応援するのは良い機会となるでしょう。吹奏楽の準備もどうぞよろしくお願いします、堀先生」

名を呼ばれた女性教諭は、にっこりと微笑^{ほほえ}んだ。

「はい、ただいま応援曲を練習中です」

大会に応援に来てほしいと春に頼んだ時に、何を言っているんだコイツと言いたげな目で「すみません無理です」ときつぱり断られたのは夢だったのかと思うほどの好感触だ。

「野球部同様、皆さんもお忙しいとは思いますが、部活動にますます励んでください。我が校はとくに運動部が消極的といえますか、もう少し熱を入れてもよいのではないかと思いますよ。夏休みを前に、各分野の大会も多く、三年生にとっては最後の夏となります。よりよい思い出を築けるよう、お願いいたします」

新聞をたたみ、校長が一礼すると、教師たちも一礼した。

若杉は⁽³⁾だらだらと汗をかきながら、席についた。校内行事ラッシュの六月も、あと一週間で終わろうとしている。梅雨まつさかりの高い湿度も、冷房のよくきいた職員室にはあまり関係ないはずだが、いやな汗が止まらない。

「野球部、すごいですねえ。月谷くんがドラフト候補というのは本当なんですか」

席に座ると、すかさず堀が話しかけてきた。若杉より五歳近く年長で、担当は英語だ。机が遠いこともあって、必要最低限のことしか話した記憶はないので、彼女のほうから近づいてくるのは非常に珍しい。

「い、いやいや。まさか。いい投手だと思えますけど、彼は一四〇とか出ませんし」

「でも先週出た高校野球雑誌にも、隠し球として紹介されましたよ。すごいじゃないですか」

よく知っているなと⁽⁴⁾舌を巻く。新聞はともかく、野球雑誌を買うのは相当ではないか。おそらく自校の生徒が出ているとウササを聞きつけて購入したのだろうが、嬉しいというより戸惑いのほうが大きい。

練習試合でたしかにスカウトが月谷に挨拶し、二、三投げ方についてアドバイスしましたが、本当にそれだけだ。若杉にも「いい投手ですね」と褒^ほめてはいたが、「いいチームですね」同様に含みは感じなかった。

「うちからこんな子が出るなんてねえ。月谷くんは授業でも真面目だし、応援したくなりますね」

「えっ!？」

突然大きな声を出した若杉を、堀は驚いたように見返した。

「なんですか？」

「いや、すみません、なんでもないです」

あの野郎、俺の授業は寝ているくせに。英語はきちんと受けるのかコノヤロウ。とはさすがに言えない。

「そういうえげネットのほうでは、笛吹も紹介されていましたよ」

正面に⁽⁵⁾陣取る教師が、口を挟む。恰幅^{かっかく}のいい数学教師で、見るたびにいつも^{*}ネットサーフィンをしているが大丈夫なのかといつも思う。

「そのサイト作成者は素人ですが昔から有名な人のようですね、春に見たとかで。欠点も多いが将来が楽しみな逸材だと書いてありました」

「そ、それは光栄ですね。ははは……」

「今年の夏は賑^{にぎ}やかになりそうですね。全校応援なんて、はじめてじゃないですかねえ」

「こ、コウエイ…デス……」

「そくだ若杉先生、吹奏楽の⁽⁶⁾ティンパン曲の譜面は揃えたんですけど、なんでも選手ごとに応援曲を決めるものになんですって？皆さんの希望の曲があったら教えてくださいませんか。好きな曲演奏したらテンションあがって打てるでしょう！」

「⁽⁶⁾ソウカモデスネ……」

⁽⁷⁾だんだん自分が何を喋^{しゃべ}っているのかわからなくなってきた。

期待されるのはありがたいが、④カジョウウなもの重い。今のチームが強いのは、本当にたまたまだ。たしかに高校生の成長は凄まじい。それは知っているつもりだったが、月谷の成長は予想をはるかに上回るものだった。そして笛吹のリーダーシップがまったくの予想外だった。この二点につきる。

本気で甲子園に行きたいと月谷が打ち明けた時、こちらも本気でなんとかしてやりたいとは思った。去年は自分のわがままで中村ら三年生を優先したし、今年は月谷たちの思うようにさせてやりたいかった。

だが、なんとかしてやりたいと思いつつも、頭の中の冷めた部分では、どうにもできないだろうと思っていた。それがわずか数ヶ月で、月谷はとんでもない成長を見せた。田中のツテを伝い頼みこんで指導に来てもらった名門実業団チームのピッチングコーチが、「就職するつもりでしたら、うちの会社も候補に入れてもらえませんか」と本気か冗談かわかりかねる表情で若杉に打診してきたほどだ。

そして笛吹。センスは抜群も主将としての能力は疑問視していたが、これは自分が見誤ったと反省している。中村との件があったし反抗的だったので色眼鏡で見ってしまったところは認める。

憎まれ役に徹してもチームを引き上げようとする姿勢を見て笛吹があえて三ツ木を選んだ理由がわかったような気がした。中学時代、厭でたまらなかった「エース」を髪が抜けるほどのストレスの中でこなしていたように、必要だと言われれば全力で応じてしまうのだろう。

気にして日々チェックをしているが、あれ以来、髪は抜けてはいない。が、ストレスは相当なものだと思う。

彼ら二人をメインに、三ツ木野球部は一足飛びに階段を駆け上がっている。どちらか一人が欠けても難しかった。部員たちもじつによくついてきた。田中がいてくれたのも大きい。

そして、周囲の指導者たちだ。おっかなびっくり参加した県内の監督会で多くの監督と知り合い、教えを乞えば皆快く効果的な指導法を教示してくれた。監督会の理事長である広栄の設楽監督などは、全国から殺到する申し込みの間を縫って、練習試合も組んでくれた。

「練習試合をどんどんしたいというのは、正しいですよ。私も駆け出しのころ、県内の強豪に練習試合を申し込んではずいぶん断られ、悔しい思いをしました。ですから私は、本気で申し込んでくる相手ならばどこでも練習試合を受け入れるようにしているんです」

その言葉にどれほど救われたことか。練習試合の日程は何ヶ月も前、それこそ半年も前に決まることも少なくないので、広栄とやると決まった時点で、他の学校への申請も格段に通りやすくなったのは、なにかの手品でも見ているようだった。

三ツ木野球部は、周囲に育てられたと若杉は思っている。それを全力で選手たちが吸収した結果だ。そこはいい。だがわずか数ヶ月のうちにこんなに評価が反転するとは思わなかった。

カジョウウな期待は、困る。とくに今は。

なにしろ野球部は今、若杉が監督に着任して以来最大のピンチを迎えている。ひょっとしたら、夏の大会どころではないかもしれないのだ。

(注) ※東明Ⅱ甲子園常連の強豪校。

※ネットサーフィンⅡ目的もなく、ウェブサイトを検索したり、いくつものウェブページを渡り歩いて閲覧すること。

問一 傍線部㉗㉘㉙のカタカナを漢字に改め、漢字はその読み仮名を書きなさい。

問二 傍線部㉚・㉛に相当する漢字を含むものを、それぞれ次の語群①～④の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ㉚ テイバン 【①バンセツを汚す ②バンガイ編の製作 ③ドウバンの加工 ④A4バンの用紙】
- ㉛ カジョウウ 【①ジョウウカの外堀 ②ジョウヨ金の分配 ③ビンジョウ商法 ④ジョウウキを逸する】

問三 傍線部(1)「しどろもどろに」と傍線部(3)「だらだらと」について、次のA、Bの問いに答えなさい。

- ① (1)・(3)には同じ修辭技法が用いられているが、何と呼ぶか。左のA、Bの中から一つ選び、記号で答えなさい。
- 【A 直喩 イ 隱喩 ウ 誇張法 エ 擬人法 オ 擬態語】
- ② (1)・(3)からうかがわれる若杉の心情の説明として適当でないものを、左のA、Bの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 先生方の目が自分に集まり、当惑している。 イ 校長から経験が浅いと皮肉られ反発している。
- ウ 新聞に取り上げられて心の底では困っている。 エ 校長に激励されて逆に緊張感が増している。
- オ 野球部の現状を考え、言葉に詰まっている。

問四 傍線部(2)・(4)・(5)の意味として最も適当なものを、左のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (2) 手ぐすねをひいて
- (4) 舌を巻く
- (5) 陣取る
- | | | | | | |
|---|--------------|---|-------------|---|----------|
| ア | いよいよと緊張感を高めて | ア | うれしくて何も言えない | ア | 座席を変更する |
| イ | 十分に用意して今か今かと | イ | 威圧されて何も言えない | イ | 戦う体制をとる |
| ウ | 周辺の動きを警戒しながら | ウ | うそだとわかりあきれる | ウ | 十分注意を払う |
| エ | 突然の事にとまどいながら | エ | 驚き感心して言葉を失う | エ | 長い間待機をする |
| オ | とりあえず急いで準備して | オ | 話が違うと不満を述べる | オ | 場を構え占有する |

問五 傍線部(6)「ソウカモデスネ……」とあるが、作者はなぜ若杉のこの言葉をカタカナ書きにしたのか。次の文の()内に若杉の心情を説明する言葉を入れることによって答えなさい。

- 周囲からかけられる期待が大きくなればなるほど、また、周囲には言えない野球部の事情もあって、夏の大会の重圧が
 どんどん大きくなり、若杉が()
 ()といった心情になっていることを表現するため。

問六 傍線部(7)以降の文章の特徴について、次の文の()の部分に二十字以内で言葉を入れることによって答えなさい。

- 傍線部(7)以前の文章は、若杉も含め、複数の登場人物の行動や心情が、会話や地の文によって描かれているが、
 (7)以降の文章は、そのほとんどが()。

三 次の『竹取物語』の一節を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合により本文を一部改めた部分がある。)

七月十五日の月にいでて、せちに物思へるア^ア気色^{きしよ}なり。近く使はるる人々、たけとりの翁^{おきな}に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがりたまへども、このごろとなりては、ただごとにもはべらざめり。いみじく思し嘆くことあるべし。よくよく見たてまつらせたまへ」といふをききて、かぐや姫にいふやう、「なんでふイ^イ心地^{こころ}すれば、かく物を思ひたるさまにて月を^b見たまふぞ。1 うましき世に」といふ。かぐや姫、「見れば、世間心細くあはれにはべる。なでふ物をか嘆きはべるべき」といふ。

かぐや姫の※[※]在る所にいたりて、見れば、なほ物思へる気色なり。これを見て、「2 あが^{あが}仏^{ほとけ}、何事思ひたまふぞ。思すらむこと、何事ぞ」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細くX」といへば、翁、「3 月な見たまひそ。これを見たまへば、物思す気色はあるぞ」といへば、「いかでか月を見ではあらむ」とて、なほ月いづれば、いでみつ嘆き思へり。※[※]夕やみには、物思はぬ気色なり。4 月のほどになりぬれば、なほ時々はうち嘆き、泣きなどす。これを、使ふ者ども、「なほ物思すことあるべし」と、ささやけど、親をはじめて、何事とも知らず。

(注)※在る所にいたりて≡別の日にかぐや姫のいる場所に行つて

※夕やみ≡陰暦の二十日前後、月の出が遅い頃の月の出ていない夕方

問一 波線部ア「気色」・イ「心地」の読みを、それぞれ現代仮名遣いで答えなさい。

問二 二重傍線部a「見たてまつら」・b「見たまふ」の敬語表現は、それぞれ誰に対する敬意を表したのか。次のア～オから適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 翁 イ かぐや姫 ウ 近く使はるる人々 エ 読者 オ 仏

問三 傍線部1「うましき世」の意味として適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア もの寂しい世の中 イ もの足りない世の中 ウ つまらない世の中
 エ 満ち足りた世の中 オ 味わいのある世の中

問四 傍線部2「あが仏」は何を指しているか。古文中から探し、書き抜いて答えなさい。

問五 空欄Xには、動詞「おぼゆ」を活用させたものが入る。適当な活用形に直して答えなさい。

問六 傍線部3「月な見たまひそ」を口語訳しなさい。

問七 傍線部4「月のほどになりぬれば、なほ時々はうち嘆き、泣きなどす。」とあるが、その心情と結びつく箇所を古文中から探し、十五字以内で書き抜きなさい。

問八 「竹取物語」とほぼ同時期に成立した作品を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 万葉集 イ 古今和歌集 ウ 更級日記 エ 宇治拾遺物語 オ 徒然草